

ニホンザルにおける餌入手に関する情報の伝達過程の実験的分析

武田庄平（阪大・人間科学）

ニホンザル集団における情報伝達において好奇行動の占める位置は重要なものであると考えられる。好奇行動は、自らを取り巻いている環境に対して興味を示す行動であり、これは情報を取り入れるための重要な行動であり、また個体が入れた情報が他個体へと伝播する際の前駆的行動となるものである。

このような観点から、好奇行動のひとつとして“のぞき反応 (peeping-response)”を取り上げ、若桜ニホンザル集団（京大霊長研）を実験対象集団として社会的関係を反映した個体間での好奇行動の影響・促進関係の実験的分析を、性・年齢段階、血縁関係、優劣順位に関しておこなった。この際、集団内の特定一個体ののぞき反応に対してのみ食物刺戟を呈示する条件を設けた。

実験の結果、以下のことが明らかとなった。つまり、特定個体に食物刺戟を呈示することにより、特定個体の反応性（反応頻度・反応秒数）は増大した。この特定個体の反応性増大の影響は、集団内の全成員においてみられたわけではなく、特に未成年雌において顕著にみられた。このことは、未成年雌が特定個体ののぞき反応に反応追随する頻度が他の性・年齢段階よりも高いことで示された。また、特定個体と同血縁の個体は、一般に高い反応追随頻度を示したが、非血縁個体では、特定個体に食物刺戟を呈示した条件において反応追随頻度の増大がみられ、血縁個体と同レベルの頻度を示した。この頻度増大の大半を未成年雌が支えていた。さらに、未成年雌は、特定個体以外の集団成員との間でも、のぞき反応の影響・促進関係を有していたが、成体雄との間での関係は弱いものであった。成体雄は、他の性・年齢段階との影響、促進関係をあまり有していなかったのが特徴的であった。また、特定個体を除く集団成員における影響・促進関係は、非血縁よりも血縁、遠縁よりも近縁個体間に強くみられ、特に母子間において顕著に示された。個体間における優劣順位とのぞき反応の影響・促進関係の間には、あまり関連はみられなかった。

以上の結果により、ニホンザル集団における情

報伝達過程における未成年雌の果たす役割の重要性が示唆された。

課題 6

チンパンジーにおける因果性の認識

山田恒夫（阪大・人間科学）

現象の法則性を因果関係としてとらえることはヒトでよく見られる認識の様式である。ヒトと近縁な高等霊長類において、このような認識がなされるものなのかどうかを検討することは、興味深いことと思われる。本研究では、チンパンジーが外界の物理的な変化について因果性の認識を行うかどうかを検討するため、物体の衝突という機械的因果性の場面を用い、運動（厳密には運動の契機）を、因果性という手がかりから分類させることを試みた。

被験体としては9歳のメスのチンパンジー「アイ」を用いた。この被験体には図形語を使った実験の経験がある。本研究では、2物体の一次元運動場面をマイクロコンピュータ（NEC PC9801F）のグラフィックスにより作成し（640×400ドットのカラーモードを使用）、刺激とした。被験体にはディスプレイ上の幾何学図形の運動を弁別刺激とする経験がなかったため、予備訓練として、2物体（直径40ドットの赤色円）の運動状態、つまり一方が運動し一方が静止しているか、双方とも静止しているか、を手がかりに2種の図形語を選択する訓練を25セッション行った（1セッションは原則として100強化）。この結果、刺激に含まれる運動以外の属性（特に、運動後の2物体の距離や位置）を手がかりとしやすく、運動そのものは手がかりとなりにくいことが示唆された。続く本訓練では、Michotte (1963) の因果性知覚の実験を参考に、2種類の2物体衝突場面を用意し、それぞれに対して異なる図形語を選択させた。いずれの場面も、①一方が他方に接するまで運動、②接したまま2物体とも静止、③これまで静止したままの物体が一定距離運動したのち停止、という部分から構成されるが、接触後運動するまでの時間が0秒と3秒とで異なり、それぞれ起動効果、独立な運動に対応する。この課題は